

## 「いのちを学ぶ」キャンパスにふさわしい大学体育のあり方（その1） ～帝京科学大学上野原キャンパスの「スポーツ科目」の行われ方と 受講生の体育及びスポーツに対する態度の実態～

<sup>1</sup> 小山慎一 <sup>2</sup> 川田裕樹 <sup>2</sup> 植屋清見

<sup>1</sup> 帝京科学大学こども学部・こども学科 <sup>2</sup> 帝京科学大学総合教育センター・スポーツ科目  
(平成 22 年 12 月 2 日受理)

The ideal method of the university physical education in the campus that states "Learn of Life" ~ Actual Conditions of "Sports Subject" and Attitudes toward School Physical Education, Sports of the students who were attending to the "Sports Subject Class" of the first term of 2010 in the Uenohara Campus of Teikyo University of Science ~ .

Shinichi KOYAMA<sup>1</sup> Yuki KAWATA<sup>2</sup> Kiyomi UEYA<sup>3</sup>

Abstract : The catch phrase of Teikyo University of Science is "Learn of Life" and other side, a definition and the purpose of physical education are to promote an individual ability, physical health, mental health, social health, emotional health, intellectual health, occupational health and spiritual health ,and a ward of health is compound to a word of "wellness(well-being)".

The purpose of this study is to investigate the actual conditions of "Physical Education Class" that is called "Sports Subject" and the numbers of the students who are attending to the practice of physical education class, their attitudes toward school physical education, consciousness and attitude toward sports in the Uenohara campus of Teikyo University of Science. Subjects were the fresh man students who were attending to the practice of Sports Subject.

Students gave the good evaluations to these classes, but the attitudes of students toward physical education, sports could not improved as a level that were expected by the teachers of these classes. It is necessary to improve the "Sports Subject Class" in the Uenohara Campus of Teikyo University of Science.

Key word : 帝京科学大学 上野原キャンパス 大学体育 スポーツ科目  
2010 年度前期授業 保健体育科目

### I. 緒言

帝京科学大学のキャッチフレーズ<sup>1)</sup>は「いのちを学ぶ」であり、建学の精神は「人類の将来を正しく見据え、生命の尊厳を深く学び、自然と人間の共生に貢献できる人材を育成し、持続可能な社会の発展に寄与する」とされている。更に、大学の基本理念として「1. 自然に対する深い洞察力と学術に対する豊かな識見を養い、高度な専門的知識と実践的な問題解決力を備えた人材を育成する。2. 人類の幸福のために、学術を適切に運用する倫理的判断力を涵養し、知情意の均整のとれた健全な人格を育成する。3. 深く専門の学術を研究し、その成果を地域社会に還元するとともに広く世界に発信し、人類の発展に寄与する。」と述べられている。これらの「建学の精神」及び「大学の基本理念」を引き継いで、帝京科学大学のキャンパスにおける「生命環境学部」、「医療科学部」、「こども学部」に学ぶ全ての学生は「いのち→命の大切さ」を学び、自らは「健

康で・健全なる学生（若者）」であることが求められていることになる。従って、上野原キャンパスにおける各種の指導や授業等もこれらの建学の精神や大学の理念、そして各学部（学科）の目標達成に沿った学生の育成（人材育成）に向けられるべきである。

ところで、帝京科学大学上野原キャンパスは今日で開学20年を迎える大学である。1990年、理工学部の単科大学の西東京科学大学として山梨県北都留郡上野原町（当時）の地に新設され、その後1996年に現在の帝京科学大学に名称を変更し、2007年には理工学部を生命環境学部へ改組するとともに医療科学部を新設、2008年にはこども学部を新設し、学生定員2000人を超える3学部の総合大学となった。また、2010年には東京都足立区に帝京科学大学千住キャンパスが新設され、山梨市キャンパスと合わせた3キャンパス体制となっている<sup>2)</sup>。開学当時（1990）の保健体育科目は 1) 講義形式の「保健体育理論」（2単位）、2)

実技科目の「体育実技Ⅰ」（1単位）・「体育実技Ⅱ」（1単位）から成り、全学生に対して全て「必修科目」として行われていた。その後、一連の大学の大学の大綱化や本学独自の大学改革の流れの中で、従来一般教育科目の必修科目であった「保健体育科目」は学生一人ひとりの多様な課題とニーズに応えたカリキュラムの展開をめざすという指針に沿って「必修科目」から「選択科目」に、また名称を「保健体育科目」から「スポーツ科目」への改名を余儀なくされ、今日の実態に至っている。

現在の帝京科学大学上野原キャンパスにおける「スポーツ科目」の授業は1)講義形式の「健康と生活」（2単位）、2)演習形式の「健康運動学基礎演習」（1単位）そして、3)実技科目の「スポーツ」・「基礎スポーツ」・「応用スポーツ」（それぞれ1単位）の選択科目として行われている<sup>3, 4)</sup>。

開学当時は「保健体育科目」という名称で、尚かつ全学部・学科で必修科目であった。当時はその取得単位数も授業内容にも現在と比較すると大きな差異が見られ、授業は学内キャンパスのみならず、季節に応じた野外キャンプ実習やスキー教室なども「保健体育科目」の内容・種目として開講されていた<sup>5)</sup>。振り返って、開学から20年経った2010年の今日の帝京科学大学上野原キャンパスにおける「スポーツ科目」は本学に学ぶ学生にとって「いのちを学ぶ」に資する教科としてとらえられ、行われているのであろうか。

以下に2010年度前期の「スポーツ」科目の授業の内容や進め方<sup>3, 4)</sup>を示す。

- 1回目：オリエンテーション  
＜授業の目的、目標、進め方、留意事項＞
- 2回目：オリエンテーション  
＜グループ編成、各種アンケート調査＞
- 3回目：文部科学省新体力テスト  
＜主旨・測定・評価法等の説明、測定(1)＞
- 4回目：文部科学省新体力テスト  
＜測定(2)、結果の説明＞
- 5回目：集団屋内スポーツ(1) バスケットボール  
＜運動特性 基礎練習＞
- 6回目：集団屋内スポーツ(2) バスケットボール  
＜ゲーム＞
- 7回目：集団屋外スポーツ(1) ソフトボール  
＜運動特性 基礎練習＞
- 8回目：集団屋外スポーツ(2) ソフトボール  
＜ゲーム＞
- 9回目：対人屋内スポーツ(1) バドミントン  
＜運動特性 基礎練習＞

10回目：対人屋内スポーツ(2) バドミントン  
＜ゲーム＞

11回目：個人屋外スポーツ(1) ゴルフ  
＜運動特性 基礎練習＞

12回目：個人屋外スポーツ(2) ゴルフ  
＜ショートゲーム＞

13回目：補講及び総括(1)  
＜各種アンケート調査・授業評価調査＞

14回目：補講及び総括(2)  
＜各種アンケート調査・授業評価調査＞

注1：基礎練習やゲームにおいてはその種目の歴史の変遷、ルール及び運動学的、体育学的な意味や意義及び安全な授業運営の指導も行われる。

注2：雨天時には状況に応じて卓球、トレーニング、実技に関する講義・ビデオ鑑賞なども行われる。

## II. 研究目的

本研究の目的は「いのちを学ぶ」を学生育成のキャッチフレーズに掲げている帝京科学大学上野原キャンパスにおける大学体育の行われ方の実態を調査、検討し、現在保健体育科目である「スポーツ科目」の名称で行われている体育実技の授業が、果たして「いのちを学ぶ」キャンパスにおいて学生の育成に資する状況で行われているかの実態を受講生を対象に検討し、更なる改善・充実に向けての大学体育の方向性を探ることである。

## III. 研究方法

2010年度前期の「スポーツ科目」(実技種目)の1年次生：161人を対象に授業開始時と終了時に同一内容のアンケート調査を行った。

### 1. アンケート調査<sup>註)</sup>の実施内容

- 1) 本授業への受講の理由及び授業への要望
- 2) 自己の体力、健康への自信と運動神経の自己評価
- 3) 高等学校時代の体育の授業の好き嫌い（5段階評定法）
- 4) 体育の授業への態度得点—「(1)よろこび尺度、(2)評価尺度、(3)価値尺度」（各尺度10項目・50点満点）<sup>6-10)</sup>
- 5) スポーツの効果の捉え方—「(1)意志性、(2)情緒性、(3)社会性、(4)身体性、(5)阻害性」（各尺度7項目・35点満点）<sup>7-11)</sup>
- 6) 授業に対する学生による授業評価（授業終了時）尚、アンケート調査の統計処理はMicrosoft Excel、

SPSS を用いて行った。本研究においては統計的有意水準を5% ( $P<0.05$ ) 以下とした。

註)：アンケート調査の内容に関しては参考までに巻末にその一部を付記する

## IV. 結果

### 1. 2010年度前期授業の1年次生の受講状況

表1は2010年度「スポーツ科目(実技種目)」の前期授業の受講生の学部・学科別の受講生の人数をまとめたものであるがその受講数及び受講の比率は学部・学科による違いは見られるが極めて少なく低い実態であった。最も多い学科(柔道整復)で63.2%、少ない学科(こども)は0%で、平均で37.2%であった。

表1 2010年度1年次生前期授業の受講者数と在籍数に対する受講率

学部	学科	在籍数(人)	受講者数(人)	受講率(%)
生命環境学部	生命科	26	19	73.1
	アニマルサイエンス	185	72	38.9
	自然環境	43	20	46.5
医療科学部	理学療法	98	34	34.7
	作業療法	34	4	11.8
	柔道整復	19	12	63.2
こども学部	こども	22	0	0.0
総計		427	161	37.7

### 2. 受講生の体育の授業の好き嫌い

表2は本授業の受講生の高等学校時代の体育の授業の好き嫌いの5段階評定法の結果である。「大好き」・「好き」群を集計すると男子学生では74.8%、女子学生では85.2%と女子学生の回答が高く、全体的には78.3%であった。基本的には高等学校時代に体育の授業が好きだった学生が受講している傾向であった。一方、「嫌い」・「大嫌い」とする学生も12人いた。

表2 受講生の高等学校時代の体育の授業の好き嫌いの5段階評定の結果

	大好き	好き	どちらとも	嫌い	大嫌い
男子(n)	52	28	17	10	0
(%)	48.6	26.2	15.9	9.3	0.0
女子(n)	34	12	6	1	1
(%)	63.0	22.2	11.0	1.9	1.9
総計(n)	86	40	23	11	1
(%)	53.4	24.9	14.3	6.8	0.6

### 3. 本授業の受講理由と授業に対する要望

本研究の対象となった受講生の本授業を受講しようとした主たる理由や本授業に対する要望(複数回答)は男女で若干の違いは見られるが、男子学生に関しての第1の理由は「体力づくり」(53人)、次いで「気分転換」(48人)、「運動技能の向上」(32人)そして「仲間づくり」(22人)、「友達が受講するから」(17人)であった。女子では、第1位は「気分転換」(38人)で、次いで「体力づくり」(34人)、以下「運動技能の向上」(26人)、「仲間づくり」(20人)「友達が受講するから」(8人)で、その順位は男子学生と同様であった。その他の回答で「必修だから」という回答が男子学生で「7人」、女子学生で「5人」であった。

### 4. 自己の体力、健康への自信と運動神経の良し悪しの自己評価

自己の「体力」、「健康」への自信度と「運動神経の良し悪し」に関する5段階評定法(-2:強い否定→+2:強い肯定)の結果は男子学生では「体力」(-0.14点±0.150)、「健康」(0.16点±0.52)、「運動神経」(-0.38点±0.78)で、女子学生では「体力」(0.13点±0.50)、「健康」(0.00点±0.48)、「運動神経」(0.38点±0.93)と「-2点」~「+2点」の5段階評定のほぼ中間「0点」に相当する自己評価であった。

### 5. 体育の授業に対する態度得点

授業開始時、終了時及びその変化

表3は体育の授業に対する態度得点を男女別に示したものである。授業開始時の調査は第1回目のオリエンテーション時に本授業の影響が全く及ぼされない状況でこれまで受講してきた体育(小学校時代)・保健体育(中学校、高等学校時代)の授業の総括としての態度得点を(1)「よろこび」尺度、(2)「評価」尺度、(3)「価値」尺度として回答(各尺度50点満点)させた。

授業開始時も授業終了時においても男女共にその得点は「よろこび」尺度>「評価」尺度>「価値」尺度であり、体育の授業の楽しさは感じつつ、授業としての価値は必ずしも認識していないという実態であった。

半期間の授業を経ての変化に関しては男子学生では「合計点」( $P<0.01$ )、「価値」・「評価」で有意な向上( $p<0.05$ )が見られたが、女子学生では「よろこび」・「評価」・「価値」・「合計点」のいずれにも有意な向上は見られなかった。

表3 授業開始時、終了時の体育の授業に対する男女別の態度得点とその変化及びその有意水準 (\* p<0.05) \*\*p<0.01)

		よろこび	評価	価値	合計点
男子	開始時	39.0 ± 6.42	35.8 ± 6.63	34.0 ± 10.03	108.8 ± 18.29
	終了時	40.8 ± 6.93	37.5* ± 8.36	35.9* ± 11.75	114.2** ± 21.63
女子	開始時	39.9 ± 6.30	37.6 ± 6.49	35.4 ± 10.72	112.9 ± 19.45
	終了時	40.8 ± 6.20	42.4* ± 7.01	36.0 ± 12.72	115.0 ± 21.40

6. スポーツの効果に対する態度得点

授業前後のスポーツの効果に対する態度得点を男女ごとに算出し、その変化の有意水準を示したものが表4である。

授業開始時及び終了時において、男女共に得点の

高い方から「身体性」>「社会性」>「意志性」>「情緒性」であった。授業効果として統計的に有意な向上を示した項目は男子では意志性、社会性と合計得点 (p<0.01) 及び身体性 (p<0.05) で、女子では意志性 (p<0.05) と合計得点 (p<0.01) であった。

表4 授業開始時・終了時におけるスポーツの効果に対する態度得点とその変化の有意水準 (\* p<0.05 \*\* p<0.01)

		意志性	情緒性	社会性	身体性	合計	阻害性
男子	開始時	24.6 ± 5.03	23.8 ± 4.40	25.4 ± 5.13	26.7 ± 4.94	100.5 ± 16.80	14.7 ± 4.12
	終了時	27.6* ± 5.31	25.1 ± 4.43	27.9 ± 5.15	28.5** ± 5.01	109.1** ± 18.3	14.3 ± 4.89
女子	開始時	25.8 ± 4.46	23.6 ± 4.46	26.5 ± 4.48	27.9 ± 3.78	103.8 ± 15.28	13.5 ± 3.38
	終了時	28.2* ± 3.71	24.8 ± 4.66	27.7 ± 4.40	29.4* ± 4.19	110.7** ± 14.5	13.5 ± 4.77

7. 学生による授業評価

表5は本学における前期授業の受講生による授業評価に類する項目をスポーツ科目独自で作成し、5段階評定法(強い否定:-2点、強い肯定:+2点)で回答を求めた結果である。得点の高い項目は男女ともに1)授業は充実していた(男子:1.72点±0.48、女子:1.82点±0.43)、2)授業を通して友人が増え

た(男子:1.69点±0.49、女子:1.70点±0.69)、3)教員の熱意は十分に伝わった(男子:1.65点±0.56、女子:1.70点±0.56)等であったが、必ずしも「運動の習慣化に結びつく授業」であったとのとらえ方は高い結果(男子:1.03点±0.90、女子:1.00点±0.77)ではなかった。

表5 授業終了時の学生による本授業への5段階評定の結果

調査項目	男子	女子
1. 授業の主旨を理解して受講できた	1.46 ± 0.58	1.30 ± 0.80
2. 授業は充実していた	1.72 ± 0.48	1.82 ± 0.43
3. 施設や用器具は整っていた	1.33 ± 0.92	1.44 ± 0.81
4. 授業の内容は満足できた	1.49 ± 0.75	1.49 ± 0.77
5. 授業の展開は満足できた	1.46 ± 0.69	1.44 ± 0.79
6. 教員の熱意は十分に伝わった	1.65 ± 0.56	1.70 ± 0.56
7. 体力の向上に結びつく授業だった	1.39 ± 0.81	1.54 ± 0.59
8. 運動能力の向上に役立つ授業だった	1.32 ± 0.78	1.41 ± 0.80
9. 運動の習慣化に結びつく授業だった	1.03 ± 0.90	1.00 ± 0.77
10. 授業を通して友人が増えた	1.69 ± 0.49	1.70 ± 0.69

V. 論議

～体育とはどのような教科で、「いのちを学ぶ」をキャッチフレーズとして掲げる本学のスポーツ科目はどのような授業であるべきかを論点に～

我が国における体育とは小学校では「体育」、中学校・高等学校では「保健体育」なる名称で行われており、文部科学省の学習指導要領<sup>12)</sup>の指導のもとに、組織的且つ計画的に行われている。具体的に

は、例えば小学校体育では体育の目標を「心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるとともに健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる」とされている。また、中学校、高等学校においても小学校の目標をベースに生涯にわたっての運動に親しむ習慣を育てつつ、「健康の保



持増進と体力の向上を図り」、「明るく豊かな生活を営む態度を育てる（中学校）」、「明るく豊かで活力のある生活を営む態度を育てる（高等学校）」というように明確な目標に基づいての授業の展開が文部科学省の学習指導要領の指導の下に全国的な共通目標として指導されるようになっていく。

しかし、大学の「保健体育」に関しては上記のような小学校、中学校、高等学校のように文部科学省の学習指導要領に沿うような明確な目標やその目標達成のための内容（教材としての分野・領域等）が明確にされているわけではなくそれぞれの大学の裁量に委ねられてきた経緯がある。従って、「保健体育」なる科目を必修教科とすべきか選択教科か或いは授業内容等に関しての統一的な状況はない。名称に関しても「保健体育」もあれば「生活と健康」や「スポーツ科目」と言ったようにそれぞれの大学の裁量で行われているのが実情である。但し、多くの大学においても、いわゆる「保健体育」科目の内容は、本学でも行われているような「講義」・「実技」・「演習」形式で行われているのが現状である。しかし、大学生にとって「保健体育」科目の果たすべき役割や機能を考えたときに「保健体育」科目は極めて重要な科目であるとの見解に立つ考え方であり、そのための授業の実施である。

広辞苑<sup>13)</sup>によれば体育とは「健全な身体の発達を促し、運動能力や健康で安全な生活を営む能力を育成し、人間性を豊かにすることを目的とする教育」であり、広く学術的には、「Physical education is a way of education which are selected and carried on with full regards to a value of human growth, development and behavior」<sup>14)</sup>であり、「Physical education has as its aim the development of physical, mental, emotional through the medium of physical activities」<sup>15)</sup>とされているものである。

本上野原キャンパスにおけるいわゆる、保健体育科目の名称は「スポーツ科目」なる名称で行われているが、果たして大学保健体育科目の授業科目の名称としてこの「スポーツ科目」なる名称は適正なものであろうか。一般論として、スポーツとは「陸上競技・テニス・水泳・ボートレースなどから登山・狩猟などにいたるまで、遊技・競争・肉体的鍛錬の要素を含む身体運動の総称」（広辞苑<sup>13)</sup>）とされている。

また、文部科学省の諮問機関である保健体育審議会の答申<sup>17)</sup>に見る「スポーツの意義」に関して、スポーツは、人生をより豊かにし、充実したものとするとともに、人間の身体的・精神的な欲求にこた

える世界共通の人類の文化の一つである。心身の両面に影響を与える文化としてのスポーツは、明るく豊かで活力に満ちた社会の形成や個々人の心身の健全な発達に必要不可欠なものであり、人々が生涯にわたってスポーツに親しむことは、極めて大きな意義を有している。答申に見られる重要な概念として、1)「豊かなスポーツライフ（生涯スポーツ）」、2)「競技スポーツの重要性や価値」、3)「フェアプレイの精神」、4)「コミュニケーション能力」、5)「健康の保持増進による国民医療費への節減効果」、6)「国際平和への貢献等」、「文化的な価値」が述べられている。

このような保健体育審議会の答申に見られるようなスポーツの本質、理念が本学の学生に理解されていけば、いわゆる大学における「保健体育科目」の名称が現行のような「スポーツ科目」でも問題はないが、スポーツの何たるかの本質もわかり得ない受講生の実態では、現状の「スポーツ科目」なる名称よりも開学当時用いられていた「保健体育」或いは「健康体育」・「健全体育」といった名称の方が学生の健全育成という観点からは授業の効果を高められるのではなかろうか。

キャッチフレーズに掲げる「いのちを学ぶキャンパス」の理解は「いのちの大切さ」を学び、自らの「いのち」を守り、育てることと理解される。いのち、つまり生命維持には呼吸循環器系、神経系、筋・骨格系、消化器系等といった生命維持の全ての機能が関わっている。本授業に関して行った「体力」「健康」「運動神経」の自己評価の結果は極めて低い。1年次生の18歳、19歳という時期は人生80年を生き抜くために、自らの体力を高め、健康に向けた各種の習慣づくりという側面から重要な時期である。

更には我が国における学校体育の目標は心身の健康（Health）、そして最終的には人間としての健全性（Wellness）の育成におかれている。

ここで、健全（Health → Wellness）とは7つの概念；1)Physical Wellness：身体的健全、2)Mental Wellness：精神的健全、3)Social Wellness：社会的健全、4)Emotional Wellness：情緒的健全、5)Intellectual Wellness)：知的健全、6)Occupational Wellness：職業的健全、7)Spiritual Wellness：霊的健全と分類される<sup>16)</sup>。

まさに人間としての「身体的」、「精神的」、「社会的」、「情緒的」、「知的」、「職業的」、「霊的」な健全性を持った学生の育成こそが本学が掲げる「いのちを学ぶ」ことの本質と考えられる。そのような観点に立てば「スポーツ科目」の授業では個々の受講生

が自らの体力や健康のみならず集団的な規範やルールの遵守、他人への思いやり、そしてそれぞれの学部・学科の理念や目標に沿った職業人になるための職業的健全まで学べる授業であるはずである。

しかしながら、体育の授業に対する態度得点、とりわけ「価値」尺度の低さやスポーツの効果の捉え方の中の「情緒性」の低さや授業の影響が反映されていない実態は筆者等の本授業を担当している指導者としての大きな反省に立って今後の授業の充実に向けた改善や努力が必要であると考えられる。

参考までに共同研究者の植屋が行ってきた他大学での授業、例えば山梨大学教育学部<sup>7-9)</sup>や(旧)山梨医科大学(現山梨大学医学部)<sup>10)</sup>等では体育の「価値」をはじめ「よろこび」「評価」(図1参照)、及びスポーツの効果の捉え方の全ての項目「意志性」「社会性」「情緒性」「身体性」「阻害性」に授業効果としての大きな改善が見られている実態がある。その意味では本学のスポーツ科目の授業にも大学における保健体育科目；「スポーツ科目」に授業の効果を反映させられないことはないと思われる。

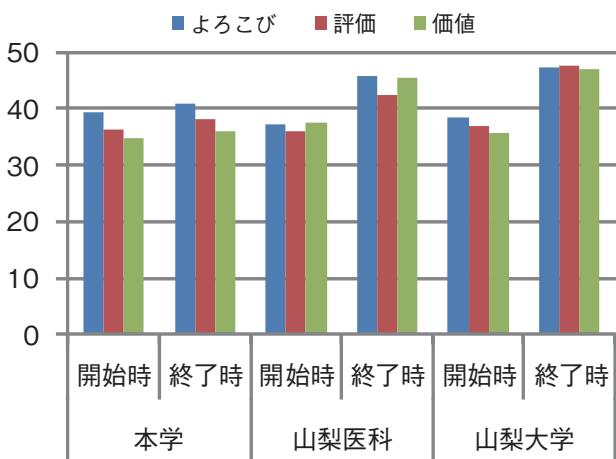


図1 本研究の受講生と他大学(旧山梨医科大学、山梨大学教育人間科学部)の授業開始時・終了時の体育の授業に対する態度得点の比較

前期授業の1年次生の受講態度に「スポーツ科目」イコール「気分転換」「息抜き」的な雰囲気が感じられたのも事実であり、筆者等が専門としているバイオメカニクス、運動方法学、運動生理学といった専門性を駆使した授業<sup>18)</sup>に成りえていない状況は極めて遺憾なことである。指導に当たる人間としては受講生の授業に望む態度の改善や体育及びスポーツの本質に立った創意工夫や努力が問われると自覚せざるを得ない。

## VI. 結 語 (まとめと今後の課題)

2010年度帝京科学大学上野原キャンパスで行われた「スポーツ科目」なる名称で行われている1年次生対象の実技種目の「スポーツ」「基礎スポーツ」の前期授業に関しては在籍数に対する全体的な受講率が37.2%と必ずしも高い値ではないが、これは後期の受講者数と合わせて考えるべきであろう。

前期授業の受講生の授業への受講の動機は「体力づくり」「運動技能の向上」「仲間づくり」等、彼らの今後の人生に影響を及ぼす体育的效果を求めているものであった。しかしながら、授業後の成果に関しては「体育の授業に対する態度得点」や「スポーツ実施の効果の捉え方」等において男女ともに、他大学の授業効果と比較して必ずしも大きな成果には至っていない<sup>7-11)</sup>。

本研究においては2010年度前期の1年次生の受講者のみを対象とした分析・検討であったが、前・後期の1年間にわたる分析や2年次生以上の学生が受講する「スポーツII」を含めた分析と検討も必要である。更には「スポーツ科目」なる名称での授業の開講の是非や新体力テストに見られる本学学生の体力の実態及び授業の捉え方と体力の関係等の検討も必要と考えられる。

(註) 付録1: 「スポーツの効果に対する態度得点」の調査項目の例

1. スポーツ活動をすると物事に対して意欲的な人間になる (意志性)
2. スポーツ活動をすると思いやりのある人間になる (情緒性)
3. スポーツ活動をすると人と協力してやる態度が身につく (社会性)
4. スポーツ活動をすると健康な身体ができる (身体性)
5. スポーツ活動は時間の無駄である (阻害性)  
(実際は各7項目ずつで、5点満点の回答で3.5点満点である)

(註) 付録2: 「体育の授業に対する態度得点」の調査項目の例

1. 体育の授業の後は快い興奮が残る (よろこび)
2. 体育の授業は体力づくりに役立つ (評価)
3. 体育の授業は何を狙っているのかわからない (価値)  
(実際は各尺度10項目ずつで、5点満点の回答で50点満点である)

## Ⅶ. 引用・参考文献

- 1) 帝京科学大学ホームページ [www.ntu.ac.jp](http://www.ntu.ac.jp)
- 2) 帝京科学大学入学案内 2010
- 3) 帝京科学大学学生便覧 2010
- 4) 帝京科学大学講義細目 2009
- 5) 帝京科学大学編集委員会、帝京科学大学創立10年のあゆみと展望－自己点検・評価報告書－2000年6月、pp.48-49 2000
- 6) 小林篤 他、大学の保健体育科目に対する学生の態度構造に関する研究Ⅰ、九州大学体育学研究3-5、pp.69-72、1967
- 7) 植屋清見、山梨大学教育学部学生の体力、運動能力および運動、スポーツ、体育に対する意識、態度、行動に関する研究、山梨大学教育学部研究報告、第40号、pp.114-123、1989
- 8) 植屋清見、小河内淳司、小学校教員の小学校体育及び体育の授業に関する実態、教育学実践学研究、山梨大学教育人間科学部附属教育実践研究指導センター、研究紀要No.5、pp.13-24、2000
- 9) 植屋清見、秋山由里、矢島真美、本学学生の学校体育の捉え方、態度及び彼らの生活実態、山梨大学教育人間科学部紀要、第2巻1号、pp.78-86、2000
- 10) 植屋清見、大学教育における保健体育科目の重要性～（旧）山梨医科大学の「健康体育学Ⅰ」の授業の実践例から～、山梨大学教育人間科学部紀要、第7巻2号、pp.175-182、2005
- 11) 石井源信、体育・スポーツに対する態度および志向性を規定する要因分析、東京工業大学人文論叢9、115-117、1979 小林篤、態度測定による体育の授業診断、第2報、日本体育学会第22回大会号、p.456、1971
- 12) 文部科学省学習指導要領、中学校学習指導要領解説「保健体育編」、pp.183-199、2008
- 13) 広辞苑（第四版）、岩波書店、東京、p.1533、1991
- 14) W. K. Streit and Simon A. McNeeley, "a platform for Physical Education," Journal of Health, Physical Education, Recreation, XXI, p.136, March, 1950
- 15) Charles A. Bucher, Foundations of Physical Education (St. Louis: The C.V. Mosby Co.), p.21, 1968
- 16) 植屋清見、生活と健康（分担）「1. 運動と健康」「8. ウオーキング, ジョギング」、山梨大学「生活と健康テキスト編集委員会」、2007
- 17) 文部科学省保健体育審議会答申、[www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/12/hoken\\_toushin/000801.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/hoken_toushin/000801.htm)
- 18) 植屋清見、小学校・中学校体育にバイオメカニクスをどう活かすか、バイオメカニクス研究概論－バイオメカニクスをどう活かすか－、第14回日本バイオメカニクス学会大会論集、第14回日本バイオメカニクス学会大会編集委員会（植屋清見編）、pp.44-49、1999